

fig. 397  
S T01平面・断面図

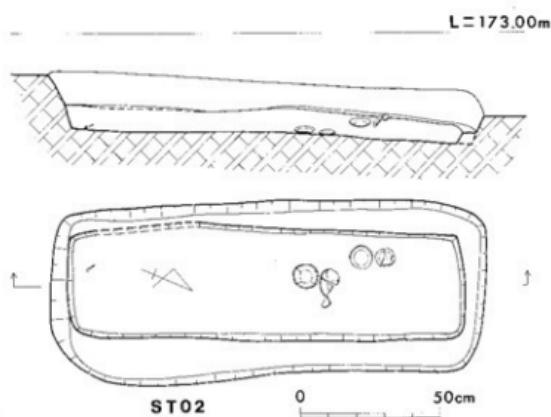


fig. 398  
S T02平面・断面図

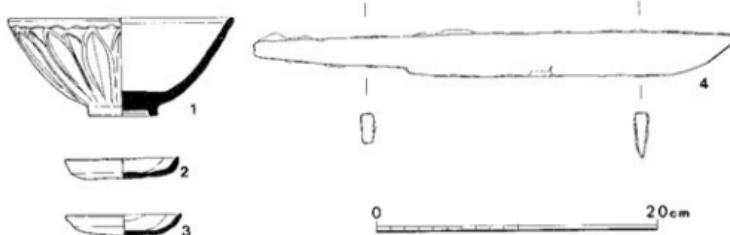


fig. 399 S T01出土遺物実測図 1 青磁 2・3 土師器 4 鉄刀

- D地区 遺物は地山直上より中世の須恵器等が出土したが、遺構は検出されなかった。
- E地区 遺物包含層は、北端の一部に認められたが、非常に薄く、調査区の大半は耕土直下が遺構面となっている。
- F地区 計40ヶ所の柱穴とピットが検出された。柱穴の中には長さ約1m、幅0.5m、深さ0.5mを測る大型の掘形のものも存在したが、建物としてまとまらなかった。遺構に伴う遺物も土師器小片があるのみで、時期は確定できない。
- G地区 遺物包含層は、調査地西半域で検出されたが、遺構はすでに削平されており全く検出されなかった。
- 3.まとめ 遺物としては、7世紀代の須恵器壺蓋や12~13世紀代の須恵器、中国製白磁、青磁類が出土している。
- 今回の調査では、調査対象地域のはば北半に遺構、遺物の集中が見られ南へ行くに従い、分布の密度は低下することが明らかとなった。
- 北半の調査で特に注意されるものは、B地区で検出された掘立柱建物群と、C地区の中世木棺墓と言える。
- 前者は主軸方位から2群にわけられる計6棟の掘立柱建物である。時期は、遺構からの遺物が極めて少なく確定的ではないが、6世紀後半を中心とする時期と考えることができる。これとほぼ同時期の掘立柱建物は、昭和58年度に調査した、辻垣内地区でも検出されている。また、今回の調査地に東接する北神中央線の調査（岡下地区）でも古墳時代後期~奈良時代の遺構・遺物が検出され、特に遺物では墨書き器や陶碗の存在が注目される。これらを考慮すると長尾川南岸の段丘上に官衙的な遺跡の存在を想定することも可能である。
- C地区的木棺墓は2基検出され、内1基には、中国龍泉窯系の青磁碗の完形品と土師器小皿が供献され、鉄刀1振が副葬されていた。またこの碗と皿の組み合わせは、東の蓮花寺地区の14世紀代と思われる木棺墓にも見られ（須恵器壺と土師器小皿）、当時の埋葬習俗の一端をうかがうことができた。

## 26. 塩田遺跡

## 1. はじめに

塩田遺跡は、武庫川の支流である有馬・有野・長尾の三河川が合流する地点より東南方に拡がる縄文時代晚期～室町時代に至る集落址である。

今回の調査地は、有馬・有野の河川が合流する箇所より南東約600mにあり、すぐ西側は有馬川の旧河道となっている。

塩田遺跡は、昭和56年度より圃場整備に伴う調査が行われ、同年には新池周辺で中国製青磁碗等が出土した。昭和57年の調査では、新池の東の丘陵裾で弥生時代中期中頃の溝や石庖丁が検出された。その翌年の調査地、新池より北東方向の丘陵裾部では、弥生時代末～古墳時代初頭の方形堅穴住居址が検出された。59年度調査では、縄文時代晚期の土器片、弥生時代中期の小型方形住居址、石庖丁及びその未製品を含む多量の石器類、12世紀～13世紀の掘立柱建物、墨書き器等を廃棄した溝、木簡を出土した土坑、ガラス小玉を副葬した木棺墓等々が検出された。

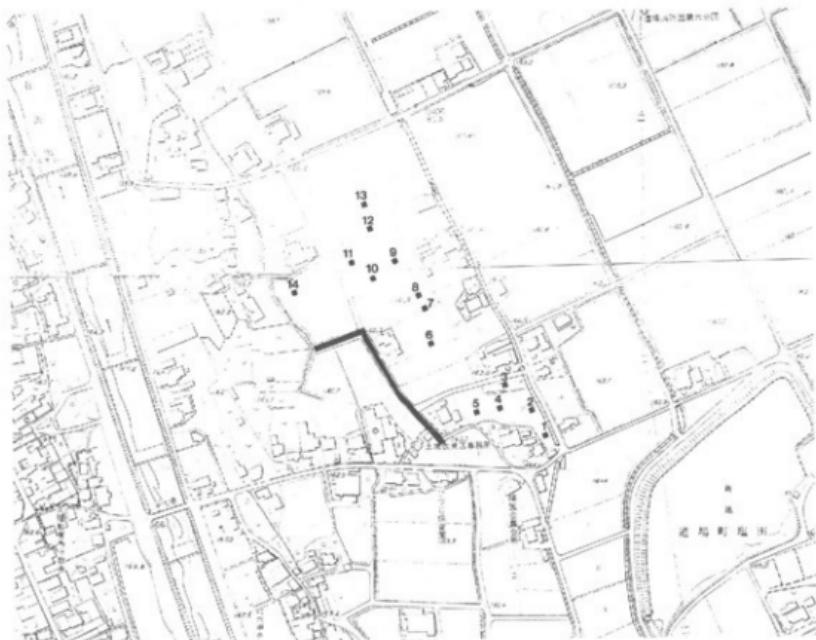


fig. 400 調査地位置図 1:5,000

**2. 調査の概要** 園場整備事業道場地区塩田工区では切土部分及び排水路部分に計72か所の試掘坑を設定し、調査を行った。そのうちNo. 1～No.14の試掘坑より弥生時代の遺構・遺物が検出された。特に試掘坑No. 7 からは多量の弥生土器が出土した。この結果をもとに、保存協議を行い計画変更の困難な排水路部分について調査を行った。

調査区の北端近くより、2棟の弥生時代中期の竪穴住居址の一部と考えられる遺構が検出されたため、調査区をその部分に限り西へ拡張し、遺構の性格及び規模等を確認することとした。



fig. 401  
試掘坑No. 7  
遺物出土状況

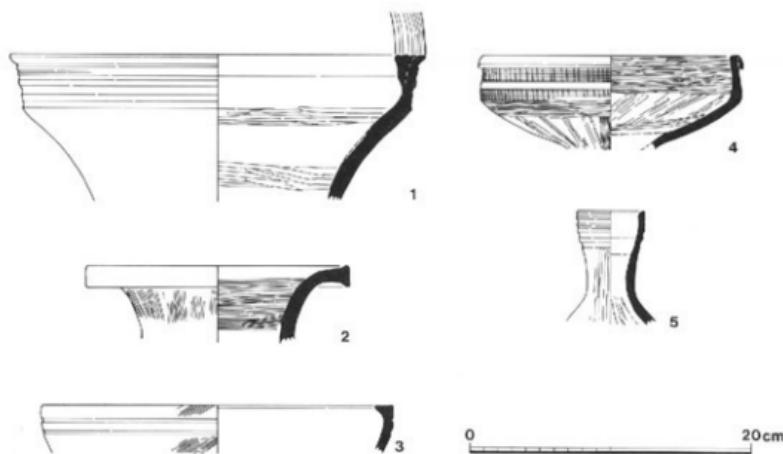


fig. 402 試掘坑No. 7 出出土器実測図

## SB01

直径8.2m、深さ0.2mの円形竪穴住居址で、壁添いに幅0.2m、深さ0.08mの周壁溝が巡る。中央に長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.34mの土坑がある。この中央土坑の埋土は、炭を含む黒色砂質土とそれを含まない暗茶色砂質土が互層となっていた。柱数は、中央土坑と柱穴とが作る角度(約25度)から推定し、14本前後と思われるが、想定される位置に柱穴が検出されなかった箇所もあり、確定はできない。

出土遺物中、特に注目されるものに磨製石剣片がある。中央土坑やや東の埋土中より出土した。住居址の時期は、出土遺物が少量のため確定できないが、弥生時代中期中葉～後半と考えられる。

## SB02

S B 01の北に位置し、これに切られる円形竪穴住居址である。直径9.2m、深さ0.3mを測る。周壁溝は北側の一部のみ検出された。中央 S B 01同様、長さ0.9m、幅0.7m、深さ0.3mの土坑を穿つ。中央土坑の埋土の最下層は厚さ0.2mの炭を含む黒色砂質土である。柱数は、中央土坑と柱穴とが作る角度(30度前後)から12本前後と思われるが、S B 01と同じく想定位置に柱穴がない箇所があり、これより少なくなるかもしれない。

住居址の時期は出土遺物より弥生時代中期中葉と考えられる。また、中央土坑の南約1.6mの埋土中より直線刃半月形の磨製石庖丁が出土している。

## 3.まとめ

塩田遺跡では、昭和59年度の調査で弥生時代前期～中期の集落が遺跡北寄りの沖代川南岸部に存在することが確認されていた。今回の調査で弥生時代中期の大型円形竪穴住居址が発掘されたことは、弥生時代



fig. 403 住居址平面図

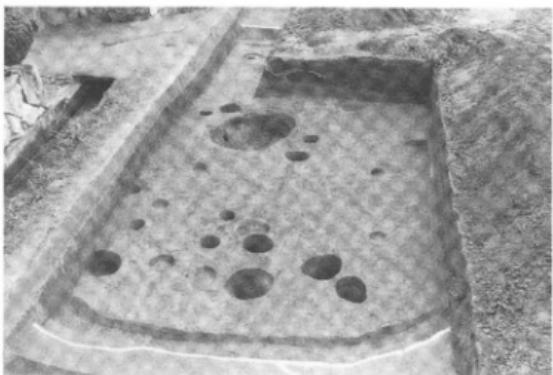


fig. 404 S B01



fig. 405 S B02

中期の段階では少なくとも2つの集落を構成する単位があったことを明らかにした。さらに昭和57年度調査の際、新池東方の丘陵裾部で同時期の溝や石庖丁等が検出された。また、近接する南所地区でも今年度の調査で弥生時代中期の遺物を検出していることは、これらも東の山地と西の有馬川に挟まれた地理的環境から、ともに一つの集落を形成する単位と思われる。よって塩田の集落単位数は4となることが考えられる。

塩田遺跡では、今までのところ弥生時代中期後半の遺物が、前代と比べかなり減少する。一方、この時期の集落としては、有馬川を越えて西の丘陵上にある北神第4地点遺跡をあげることができる。

塩田における中期後半段階の集落の衰退と北神第4地点遺跡の出現とは、何らかの関係をもつものと考えられる。

## 27. 平田遺跡

### 1. はじめに

神戸市北区道場町平田は、有馬川右岸の東西0.5km、南北1kmの沖積地上に立地している。昭和58年度から圃場整備事業に伴う、埋蔵文化財調査が実施され、平安時代以降の円形土坑等が発見されている。昭和60年度は、平田地区の集落の東に存在する水田が圃場整備対象地とされたため、昭和60年5月に試掘調査を行った結果、平田の稻荷神社朱鳥居北100mの水田と神社の参道にたつ石燈籠北側の水田で、中世の遺物包含層が発見された。そこで、用水路、排水路によって遺跡に影響のおよぶ範囲約420m<sup>2</sup>の発掘調査を実施することになった。

西から、1トレンチ（2m×90m）、2トレンチ（1m×20m）、3トレンチ（2m×90m）とし、1トレンチは、その後40m<sup>2</sup>拡張して調査した。

### 歴史的環境

平田地区の歴史は、塩田地区ほど明らかではない。稻荷神社背後の丘陵上に古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳3基が存在するが、同様の古墳は他にも3基あり、平田地区内だけで合計6基存在する。いずれも有馬川右岸の丘陵上に存在し、6世紀後半代に築造されたものと思われる。同時期の遺物は試掘調査でも出土しており、沖積地上に古墳時代後期の集落址の存在が予測される。中世の遺物は、沖積地の各地から採集されているが、遺構の発見は少なく、円形土坑や火葬墓の存在が知られているのみで、集落の具体像を把握までは至っていない。



fig. 406 トレンチ位置図 1:5,000

## 2. 調査の概要

- 1トレンチ 耕土から50~80cm下の褐色粘質土で、土坑7基、溝2条、柱穴6個、ピット20個、性格不明の落ちこみ1基が検出された。
- S K 01 S K 01は、長径1.8m、短径0.8m、深さ0.1mの楕円形の土坑で、土坑内には炭灰が堆積していた。S X 01（7世紀）が埋まった後に築かれた遺構である。
- S K 02 S K 02は、南北に長い不整形の土坑である。長径4.8m、短径1.3m、深さ0.1mを測る。土坑内埋土は、暗褐色粘質土で遺物は出土していない。
- S K 03 S K 03は、南北に長い土坑（長さ3.5m、検出幅1.0m、深さ0.6m）で、上層には炭と礫を含む層があり、それをさらに掘り下げると、土坑底から須恵器壺（奈良時代）が出土した。
- S X 01 S X 01は、長さ4.5m、検出幅1.8m、深さ0.3mの落ちこみで、落ちこみ内には、さらに小さい土坑が存在する。埋土は青灰色粘質土で炭を含み、底からは須恵器壺（7世紀）と土師器が出土した。
- S D 01 S D 01は、1トレンチ東端を南から北へ流れる溝である。溝の西肩が検出されたのみで、検出幅は0.6m、深さ0.3mを測る。溝内には砂、粘土の互層堆積がみられ、水が流れていることを示している。溝内からは、11世紀の須恵器壺、自然木が出土しており、この時期の溝と考えられる。
- S D 02 S D 02は、S K 03の北側で検出された東西にのびる溝で、幅3.5m、深さ0.2mを測る。溝内からは、遺物は出土していない。
- S D 03 S D 03は、柱列の西側拡張部で検出された溝で、南北方向から西へL字形に折れる。幅は0.3m、深さ0.1mで、溝内には径0.1mのピットが5個存在する。この溝は南側が削平されて細くなるが、本来は矩形をしていたとも考えられ、竪穴住居址の周壁溝の可能性がある。径0.1mの小ピットが溝の途切れたところから西へ続いているのも、そのことを推測させる。
- 柱列 S K 03の南で3個の柱穴が検出された。掘形径0.6~0.8m、深さ0.35m、柱痕は径0.2mを測る。柱間は1.8m等間である。一番南側の柱穴掘形内から、8世紀の土師器壺が出土している。柱抜き取り後、柱穴内に入りこんだものであろう。これらの柱列は掘立柱建物の一部と考えられるが、調査区内では桁柱が検出されていないので、建物本体は東へのびているものと考えられる。
- S K 05 S K 05をはさんで南北両側にも柱穴が検出された。掘形径0.4m、深さ0.3mで柱列の軸線は北側のものと同一である。柱間隔は2mを測る。
- 2トレンチ 2トレンチは、1トレンチに直交する東西方方向のトレンチである。耕土下0.6~0.7mで、暗褐色粘質土の地山となる。遺構は検出されなかった。

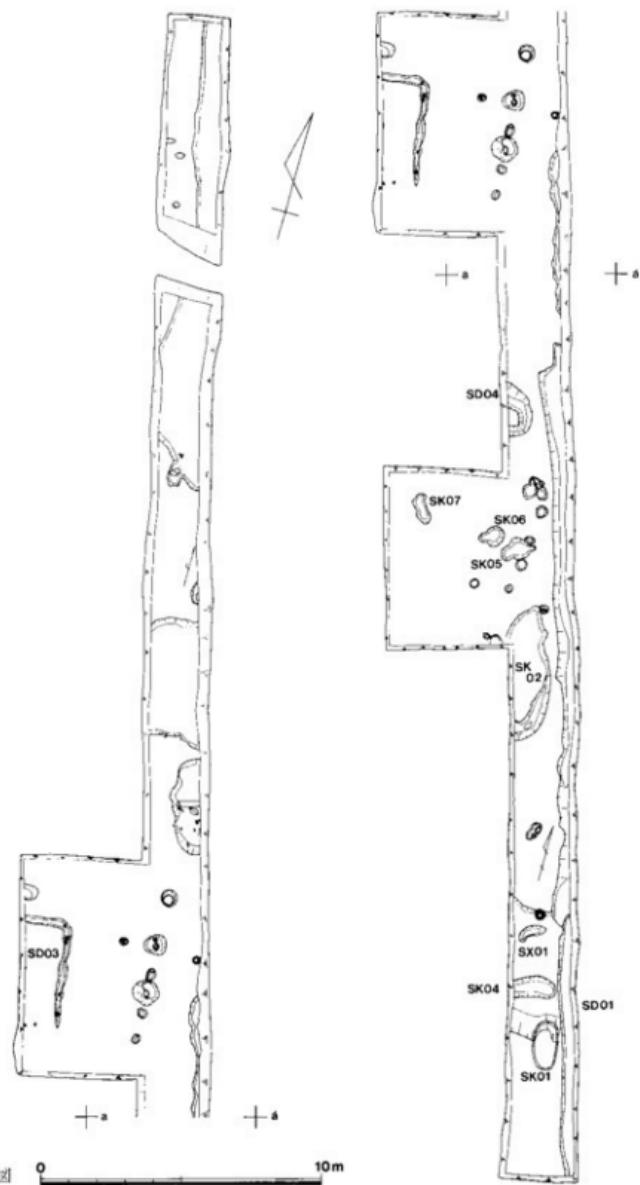


fig. 407

1 トレンチ平面図

0 10m



fig. 408  
1 トレンチ全景(南から)

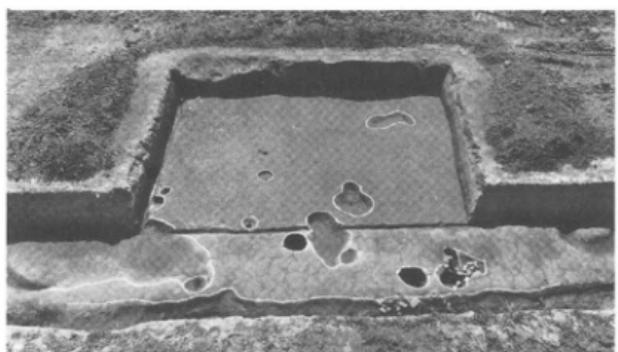


fig. 409  
S K 02および柱穴群

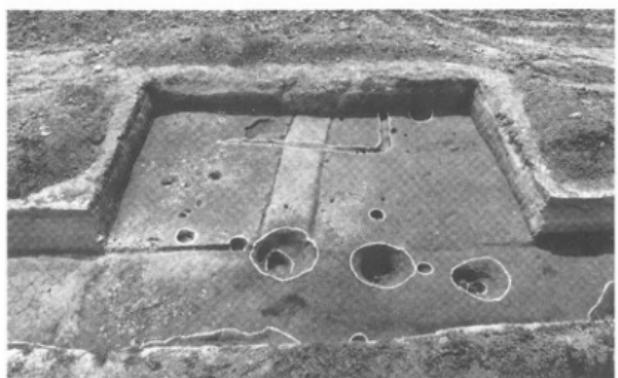


fig. 410  
S D 03および柱穴群

**3 レンチ** 平田の集落から東方の丘陵裾に設けた南北方向のレンチである。耕土下0.6mで黒褐色粘質土の遺構検出面となり、集石遺構2基、土坑6基と溝1条が検出された。

**集石遺構** 2基検出された。1基は東西1.2m、南北0.8m、他の1基は東西、南北各0.5mの範囲に凝灰質砂岩や花崗岩、硅化木を置いた遺構で、SK03とSK04の上部に作られた遺構である。石の間や上からは土師器、炭が出土し、焼けた石や煤が付着した石などもみられる。

**SK01~04** 集石をはずし0.2mほど掘り下げたところ、土坑が4基検出された。SK01は、長さ1.3m、検出幅0.9m、深さ0.15mの円形に近い土坑で、土坑

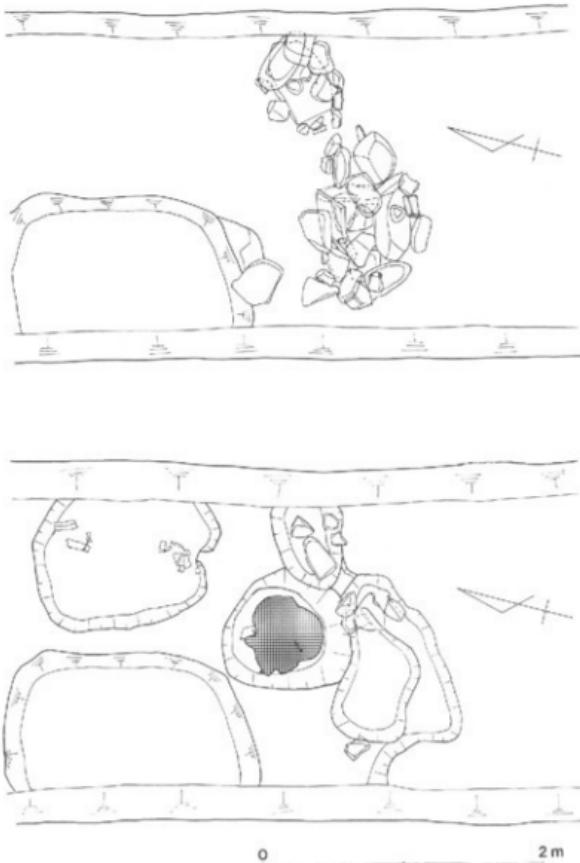


fig. 411  
SK01~04平面図

fig. 412  
3 トレンチ集石遺構



fig. 413  
集石遺構下土坑検出状況



内からは土師器と板材が出土している。SK02は、径0.9m、深さ0.1mの円形土坑で、中から竹製品や土師器が出土した。SK03は、集石の下で検出された長さ1.0m、幅0.6m、深さ0.15mの不整形の土坑である。土坑内から遺物は出土しなかった。SK04も集石下で検出された土坑で、検出長さ0.6m、幅0.5m、深さ0.15mを測る。遺物は出土していない。

**SD01** SD01は、3トレンチ中程を東西に横切る溝で、幅は1.8m、深さ0.4mを測る。溝の埋土は黒褐色粘質土で、溝内から遺物は出土していない。

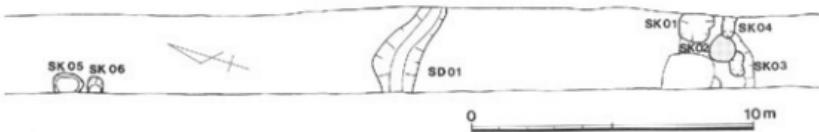


fig. 414 3 トレンチ遺構平面図



fig. 415 出出土器実測図 1・2 1トレンチ包含層 3 SX01 4 SK03 5 柱穴 6~9 SD01 10 3トレンチ包含層

### 3. 出土遺物

#### 1 トレンチ

1 トレンチの遺物包含層からは、6世紀後半から7世紀前半の須恵器壺・高環・壺と土師器、8世紀の須恵器長頸瓶、10世紀の須恵器壺、11世紀の須恵器壺・壺、黒色土器、瓦器、縁釉陶器、青磁碗、白磁碗、土師器壺・皿などが出土している。7世紀代の遺物は、トレンチ南半にやや集中する傾向があるが、11世紀代の遺物は、満遍なく出土する。他に、獸骨や輪羽口が出土している。

S X01からは、須恵器壺が出土している。口径10cm、高さ3.4cmで、7世紀中葉の遺物である。

柱穴掘形内から土師器壺が出土している。口径10.4cm、高さ7.6cm、口縁は短く外反する。8世紀代の遺物である。

S K03からは、須恵器壺と壺が出土している。壺は口径11cm、高さ4.1cmで、口縁は外側へつまみ出している。8世紀代の遺物である。

S D01からは、須恵器壺・壺などが出土している。壺は高台をもち、口クロからの切り離しは回転糸切り手法による。11世紀の遺物である。

#### 2 トレンチ

2 トレンチの遺物包含層からは、須恵器壺・壺、青磁碗、土師器などが出土している。特に須恵器壺は、1 トレンチ S D01出土のものよりは古く、10世紀の遺物と考えられる。

#### 3 トレンチ

3 トレンチ遺物包含層からは、須恵器（壺、壺、壺）、瓦器（壺、皿）、土師器（壺、羽釜、壺、壺、皿）、青磁碗などが出土している。時期は13世紀前半である。このほか、自然遺物として、トレンチ南端で多量の松等が出土した。

S K02から出土した竹製品は、径50~55cmで、土坑内のものを蔽うような状態で出土している。竹製品は、幅4~6mmの薄い竹を用いて、経の竹を中央へ集め、緯の竹を網代に組んだもので、縁は蔓を用いてつなぎとめている。その形状や大きさから笠と考えられる。13世紀前半の遺物である。

#### 4.まとめ

平田地区の埋蔵文化財調査の結果、いくつかの点が明らかになったので、それを記してまとめとしたい。

まず、7世紀代の遺構が発見されたことにより、この時期の集落が存在することは確実となった。包含層出土遺物には、6世紀末~7世紀初頭の遺物も含まれており、今後この時期にまで遡って遺構が発見される可能性がある。

奈良時代の土坑や柱穴群が発見されたことで、奈良時代まで集落が継続したことが窺われる。

S D01や包含層出土遺物の多くは、11世紀に属しており、平安時代中頃から後半にかけて、再び集落は隆盛を極めていたと考えられる。13世紀の鎌倉時代に入ると、遺物の出土する地区は、東の山裾に転ずる。そこは、むしろ墓地として利用されていた可能性があり、3トレンチで検出された集石遺構や土坑は、それを示していると思われる。現水田に残る条里制地割は、それ以降に施工されたものと考えられる。

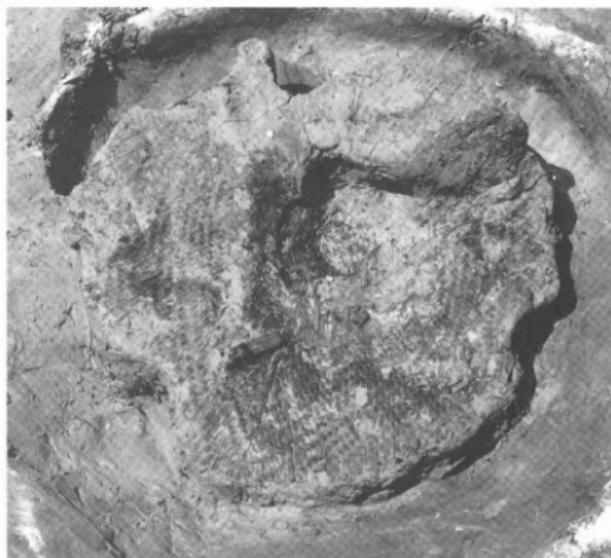


fig. 416  
3トレンチ S K02  
竹製品出土状況



### III. 神戸市域内古墳出土の赤色顔料14試料の化学分析による材質鑑定

武庫川女子大学薬学部 安田博幸 井村由美

標記の赤色顔料物質について、筆者らの常法<sup>1)</sup>に従い、ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行ない、赤色顔料物質の成分を確認したので、分析結果を関係資料とともに一括表示して報告する。

なお、それぞれの古墳の性格、遺構、遺物などの詳細については、各古墳の調査報告書や概報を参照されたい。

#### 分析用赤色顔料物質試料の外観

後掲の表中に記載のとおり

#### 実験の部

##### 分析用試料溶液の作製

各試料の赤色顔料物質着色部を約2~5mg採取し、分析用試料1~14とする。それぞれの試料をガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え、加温し、酸可溶性成分を溶解させたのち、適量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分と分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料溶液とする。試料溶液の番号は各試料番号と対応させる。

##### ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No.51B (2cm×40cm) を使用し、ブタノール硝塩酸を展開浴媒として、各試料溶液と、対照の鉄イオン( $\text{Fe}^{3+}$ )と水銀イオン( $\text{Hg}^{2+}$ )の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わった各ろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は、検出試薬として1%ジフェニルカルバジドのアルコール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として0.05%ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧し、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置 (Rf値で表現する)と色調を検した。

上記試料溶液ならびに対照イオン ( $\text{Hg}^{2+}$ ,  $\text{Fe}^{3+}$ ) の標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は下記の表1、表2のとおりである。

(1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出: ( $\text{Hg}^{2+}$ は紫色,  $\text{Fe}^{3+}$ は紫褐色のスポットとして検出される。)

表1 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

Rf値 (色調)		試料溶液 8		
試料溶液 1	0.17(紫褐色)	9	0.19( タ )	0.17(紫褐色)
タ 2	0.15( タ ) 0.93(紫色)	10	0.13( タ )	0.95(紫色)
タ 3	0.15( タ )	11	0.13( タ )	0.91( タ )
タ 4	0.15( タ )	12	0.16( タ )	0.94( タ )
タ 5	0.12( タ )	13	0.11( タ )	0.93( タ )
タ 6	0.13( タ )	14	0.18( タ )	0.97( タ )
タ 7	0.15( タ )	$\text{Fe}^{3+}$ 標準液	0.14( タ )	
		$\text{Hg}^{2+}$ 標準液		0.94( タ )

表3 神戸市域内古墳出土の赤色顔料試料の化学分析結果一覧表

古墳名	所在地	墳形・規模	埋葬上体部	副葬出土品	年代
西神ニュータウン 第9地点遺跡	西区平野町姫田	円墳?	割竹形木棺	鉄刀子	5C中? 朱漆は6C前半頃
蛭山神社1号墳	西区平野町姫田	方墳 14m×18m 高さ2.5m	第1主体 割竹形木棺直葬 第2主体 割竹形木棺直葬 第3主体 箱形木棺直葬	第1主体 鍛劍、小明鐵器、土 師器片 第2主体 小形銅鏡、鍛劍、玉 劍 第3主体 土師器片	4C後半
蛭山神社3号墳	西区平野町姫田	円墳 直径13m	箱形木棺直葬	鉄刀、刀子、鍛劍、 須恵器	6C前半
松本4地点古墳	西区樋谷町松本	不明	割竹形木棺直葬	鍛鐵、土師器	6C前半
柿谷1号墳	西区伊川谷町小寺	円墳 (直径約14m、高 さ2.5m) 円筒埴 輪列	箱形木棺 (円錐床状)	鍛鐵、鍛劍	6C前半
西石ヶ谷4号墳	垂水区舞子坂2丁 目	円墳 直径13m 高さ2.5m以上(推 定)	片袖式横穴式石室	須恵器、土師器、馬 具(鏡、檜、攻具)、 鍛鐵、刀子、釣、忍 手羽管玉、ガラス玉、 金環、切子玉	6C中頃
北神ニュータウン 第9地点2号墳	北区道場町 口下部	円墳 直径5m(推定)	中央埋葬施設 箱形木棺直葬 東埋葬施設 箱形木棺直葬	中央埋葬施設 須恵器、管玉、方 テス上、鍛鐵、鍛刀 子 東埋葬施設 玉玉、管玉、須恵器 (鏡、皮袋形提梁、 等)	6C前半
西永女塚古墳	灘区都通4丁目	前方後円墳 (全長100m以上)	斬穴式石室と思わ れるが構造、規模 は不明	不明	4C?
天王山4号墳	西区伊川谷町洞府	長方形墳 19m×16m 高さ3.3m(推定)	第1号棺 割竹形木棺直葬 第2号棺 割竹形木棺直葬	第1号棺 管玉、ガラス玉、鍛 刀、鍛鐵 第2号棺 銅鏡(八角鏡)、管玉、 ガラス玉	4C中葉
新内古墳	西区神出町東	円墳 直径約24m	木棺直葬(推定)	不明	6C前半

赤色顔料試料		確認成分	備考
試料1	北西部墳丘外出土須恵器朱袋（颈部径10cm、胴部径22cm、頸部以外欠損）内充満の赤色顔料粉末の一部（5g）	ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	
試料2	第1主体、棺底粘土一面に付着の赤橙色顔料	ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ) 水銀朱 (HgS)	
試料3	主体部、棺底より採取の小粘土塊一面に付着の赤色顔料	ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	
試料4	A-B区主体部床面採取の全面に微赤色を識別できる粘土小塊数個	ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	
試料5	床面疊床内採取の全面にわずかな赤色を識別できる粘土小塊数個	ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	
試料6	箱形木棺側壁採取の試料5と同外観の粘土小塊数個	ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	
試料7	玄室内玄門部床面粘土質土壤を彩る赤色顔料（土壤塊とも3g）	ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	
試料8	中央埋葬施設 棺側土器出土位置より検出の赤色顔料つき土壤（38g）	ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	
試料9	東端埋葬施設 端部外側の土器出土位置に検出の赤色顔料つき土壤（13g）	ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	
試料10	昭和60年度試掘1トレス区捲乱層出土の小板石（6.5cm×4.5cm×1.5cm）の ほぼ三角形の板石各面に濃淡種々に付着の赤色顔料	ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ) 水銀朱 (HgS)	
試料11	同上捲乱層より出土の赤色顔料付着の比較的かたくしまった小土塊（20g）	ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ) 水銀朱 (HgS)	
試料12	1号棺内中央よりやや南の玉類出土位置より採取の全面に赤色顔料の床面上 粒8個（8g）	ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ) 水銀朱 (HgS)	
試料13	2号棺中央部に近い鏡、玉、病の出土位置より採取の鮮赤紅色の顔料粉末 (0.32g)	水銀朱 (HgS)	
試料14	木棺直葬原土と推定される赤色顔料を残す粘土塊（4.7cm×5.5cm×3.5cm）	ベンガラ（多） (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ) 水銀朱（微） (HgS)	

(2) ジチゾンによる検出：(Hg<sup>2+</sup>は橙色スポットとして検出され、Fe<sup>3+</sup>は反応陰性のため呈色せず。)

表2 ジチゾンによる呈色スポットのRF値と色調

	RF値（色調）	試料溶液 8	呈色スポット発現せず
試料溶液 1	呈色スポット発現せず	タ 9	呈色スポット発現せず
タ 2	0.93(橙 色)	タ 10	0.94(橙 色)
タ 3	呈色スポット発現せず	タ 11	0.91( タ )
タ 4	呈色スポット発現せず	タ 12	0.95( タ )
タ 5	呈色スポット発現せず	タ 13	0.93( タ )
タ 6	呈色スポット発現せず	タ 14	0.97( タ )
タ 7	呈色スポット発現せず	Fe <sup>3+</sup> 標準液	呈色スポット発現せず
		Hg <sup>2+</sup> 標準液	0.95( 橙 色 )

### 赤色顔料14試料の材質鑑定結果

上記の試料溶液1～14についての分析結果から、対応する赤色顔料試料1～14の成分に関する鑑定結果は表3に示すとおりである。

古代文化探求の資料として活用頂けるようであれば幸いである。(1986年6月分析)

### [註]

- 1) 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『日本考古学論集1 考古学の基本的問題』吉川弘文館 (1986)
- 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝流に関する二、三の考察」『檍原考古学研究所論集 第七』吉川弘文館 (1984)

## 昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報

昭和63年3月25日 印刷

昭和63年3月31日 発行

発 行 神 戸 市 教 育 委 員 会

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

印 刷 水 山 産 業 株 式 会 社

神戸市長田区二番町3丁目4-1